



Title	ウィーン新旧音楽抗争ー八八八年（二）-いま一つの対比列伝の試み-
Author(s)	須永, 恆雄
Citation	明治大学教養論集, 510: (45)-(63)
URL	http://hdl.handle.net/10291/18104
Rights	
Issue Date	2015-09-30
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

ウィーン新旧音楽抗争 一八八八年（二）

——いま一つの対比伝の試み——

須 永 恆 雄

七

一八八八年七月シャルク兄弟はブルックナーの第三交響曲の出版の紛糾した状況をめぐって書信を交わす。十三日付の兄ヨーゼフが弟フランツに宛てた書簡を繕くと、「願わくば、君が両者の間に立って一、二週間でも我々の許に留まって、新たなキャンペーンのためにも力をつけてくれるといいが。僕はとりわけブルックナーのためにもそう願いたいところなのだ、第三交響曲のための君の提案をどうしたらいいか、彼は分からなくなっている、それも偶々ウィーンに滞在したマーラー氏のおかげですっかりブルックナーは怖気づいてしまって、またぞろ旧稿の総譜を印刷に付するつもりになっているのだ。それに対して僕はもちろん、レティヒのところへ、否を唱えて孤軍奮闘したけれどね。かくなる上はブルックナーには知らせずに、もういっぺん印刷を延期する他には手がない。彼のお気に入りのフランツちゃんが多分事バランスよく行くように上手く取り計らってくれるまではね……ブルックナーは宮廷礼拝堂の職務のために夏中

ウィーンを離れられないのだ!!」一週間後の二十日に再びヨーゼフはフランツに認める、

「親愛なる弟よ!

パイロイトが始まる前に君に一筆啓上するが、第三交響曲のために君がブルックナーに執筆を表明した序文を、どうかまだ書かずにおいてくれたまえ。一番いいのはこの機会を先ずは暫定的に冬眠させておくことだが、それを彼につゆ悟られてはならない。印刷が延期になり、そこへまた君が書信をしたためたりすると、この件で彼が現に今陥っている残念ながら神のみぞ知る紛糾を、なおさら昂じさせるだけともなりかねない。ことマーラーに関しては、レーヴェが彼の見解並びに我々の見解を熱心にブルックナーに説いて聞かせたところだ。という次第にて、いずれにせよ、万事静観していてくれたまえ。君が戻ったら、折がめぐって来るかも知れない、つまり君の影響力が個人的に有効に働く折が来るかも知れない……」

もとより良かれと思って周囲の取り巻きが熱心に勧めたキャンペーンはまさに同時代の評価を求めていることであつたが、つまりは余りに独特にして唯一無二の師の音楽語法を、必ずしも作者の真意を映すものではなく一種の舌足らずの招来したものと拙速の判断を下した故か、あるいはそこまで軽率の独善ではなかったにせよ時流即ち一世を風靡し且つブルックナーも私淑するヴァーグナー流に合わせることを成功の便法と許容しての暫定的処置であつたか、いずれにしても弟子や支持者による改訂の勧めにマーラーが同調しなかつたらしいことは、己の時代は先の世に巡ってくと述懐したとも伝えられる「未来の同時代人」マーラーの面目躍如として面白い。

* * *

七月三日にヨアヒムはブラームスにシュトゥットガルトでの音楽祭にまつわる書信を認めている。曰く、「リヒャル

ト・」バルトの手紙は、恥を晒して告白すれば、すでにシュトゥットガルトの最終日以来すですと、つまり一週間も、僕の手許に留まっていた。シュペーマン氏から渡されたものだ。願わくは君の姿が音楽祭にみられなかったことの無念、我々皆が感じた無念にその内容は尽きるものであらんことを。シュペーマン宅は君にも気に入ったことだろうに。愛すべき人たち、大人も子供もだが、魅力的な、飾り立てたところは無いが、宮殿とも見紛う館での、居心地良いもてなし、涼しい部屋く、それに庭。コンサートホールは暑さは野蠻なほど酷かった。だが聴衆の関心はそれにもめげずのものだった。君の協奏曲は上首尾に行った。クレンゲルはハウスマンよりらくらくと弾いた。ハウスマンが熱演だったのに比べてね。——ところで今になって言いたいことは、どんなに僕がこの総譜に感謝しているか、またそこに記された予期せぬ親愛の情のこもった言葉に感謝しているかということだ。これほど見事な芸術作品の成立のよすがになり得たとは、僕のヴァイオリンもまんざらでないと誇ってよいものだ！ また近々新作を目にしてそれを音にして聴くことが叶うようになりたいものだ、我々共にね。

プログラムを二部お送りする、学校がどんなことをしているか君にも分かって貰えるように。君にも聴いたら喜んでくれたことだろう。——ヴィードマンからよろしくとのことだ」。

最後に触れられている「学校」では二四日にバッハのカンタータ三曲が演奏された。またシュトゥットガルトの音楽祭で演奏されたのはヴァイオリンとチェロの二重協奏曲であるが、今なお著名なクレンゲルがその一翼を担った。

Chronologie. 1. Bd. S. 555f.

A. B. Briefe. 2. Bd. S. 40.

Joachim. 2. Bd. S. 232.

八

一八八八年八月一日の水曜日には第三交響曲第四楽章第七三小節から八九小節までにこの日の日付が記され、つづいて二日には同じく九〇から九一小節に、三日には九二から一〇四小節、四日に一〇五から一一三、一日とんで六日に一四三から一五四、七日には前に戻って六五から七二および一一四から一二八小節目にそれぞれの日付が記されているのは、バイロイト詣でを終えてザンクト・フローリアンへまわったブルックナーがこの曲の改訂に勤しんだ証しであるが、主としてそれは平行五度の追放に向けられ、弟子たちも手伝ったという。十二日にはリンツの音楽家マルティン・アインファルトがブルックナーの第七交響曲のアダージオの主題により即興演奏を披露し、ブルックナーはそれを寿ぐ。十五日にはブルックナーが、かねて新聞に予告してあったオルガン演奏会を同地で開催する。十六日から二十一日まで連日また、先と同様の自作改訂の日付が同じ曲の第四楽章に日毎に記され、二二日に《音楽新報》はリンツ・ヴァーグナー協会の主催によりブルックナーの『アヴェ・マリア』がゲレリヒとシュミットにより上演されたことを伝えるが、二三日と二四日には三たび戻って第三交響曲フィナーレ楽章の毎日の改訂の記録が残されている。聖アウグスティヌスの祝日に当たる二八日の火曜にはザンクト・フローリアンでの聖務に、ラッソのミサが一曲と、ブルックナーの『オッフエルトリウム』が演奏され、ブルックナーはミサの執り行われた後に、これも予め新聞に予告されていた通り、オルガン演奏を披露した。

この八月にはシュタイアでブルックナーはレーダーやアルメロートらと度重なる会合をもったが、彼らを含め、ランベルク伯爵夫人をはじめとする面々により結成された機関から六百フロリンの年俸を得るとともに、その返礼として

年に一度オルガンコンサートを行う契約を結んだ。

* * *

「親愛なる友よ！

ジムロックが親切にもジキソウシヨウに君の『ジプシーの歌』の校正刷を送ってくれた。君のこの作品に僕はもうすっかり惚れ込んでしまって、元気溼刺たるこれらの歌の新鮮さと熱気をたびたび愉しんでいる。ながらく君の消息を耳にしないが、つい何日か前にやっとベルヒテスガーデンでフェリンガー夫妻から君の住所を知った次第だ。彼の地では僕の旧友の別荘でリンデヤシューマン夫人にも会った。あの方はもとよりもう若くはないが、しかし年寄りでもない。我々は君の作品について大いに熱中して喋ったよ。リュプケたちにもザルツブルクで出会った。彼は重い病を患っている、しかし相も変わらず下手な冗談を絶やさない。彼女の方はもうまったくの老人だ、七一だよ！ 年をとるといのは全く以て宿命的なことだ。家内との五日間のベルヒテスガーデンとザルツブルク行き小旅行は、旧友たちとの再会を目して企てたのだが、あいにく五日間のザルツブルクの秋時雨に付き纏われた。ここいらの夏は今年は総じてひどいものだった。かくなる上は晴れの九月を望むばかりだ。全体としてはまあまあ何とか上首尾に運んだが。二番目の娘は益々進行する貧血と衰弱で冬から春にかけては僕の絶望の種だったが、またじつはもう心中では葬ってしまった気分だったが、回復の兆しがみえつつある。とても憂鬱でしばしばあまりに弱々しく、ベットで身を起こしてすら失神する始末だったが、今はまた陽気になってきた、澆刺とはまだいかないまでもね。死んだ者を嘆くか、それとも幸せだったと讚えるか、場合場合だよ！ それにしてもこんな長患いはまったくみじめなものだ。君が帰途にこちらへ足が向いたら、僕らを訪ねてくれると嬉しいが。九月二二日まで当地に滞在し、それから僕はアウスゼーとミュンヒェンを経由して、どちらに

も二、三日泊まりながら、ウィーンへ戻る。あっちでは一〇月一日に仕事を再開するからね。——ハンズリックはここ何日かの内に僕を訪ねたいと言ってきた。じきにまた君の消息を知らせてくれたまえ!

君の

「h.ビルロート」

と、これは二二日にザルツブルク近郊はザンクト・ギルゲンからのブラームス宛ての書簡であるが、それに応えて後者が「君の手紙はことのほか嬉しかった。ずっと待ちわびていた——まさに願ったりのものだった。善意と、書く意欲と、またありとあらゆる考えられ得る限りの点で、君は僕を凌駕している」と喜びを吐露した返事出したのは一週間後の二九日であった。

Chronologie. 1. Bd. S. 557f.

Billroth. S. 427f.

九

一八八八年の九月もまたひきつづき、朔日から始めて日毎に小節毎に第三交響曲終樂章の改訂に勤しんでいた記録が残されている。六日にはパリの音楽新聞〈音楽案内〉にヤコブ・ヴァン・サンテン・コルフによるブルックナーについての記事の第一部が、また一週間後の十三日には第二部が掲載された。《未来の交響曲作家アントン・ブルックナー》と題されたその文章に曰く、「たしかにブルックナーこそは来るべき未来に所属する芸術家、必ずやその真価が報われる時が来る芸術家であるが、そのせいか現代にはほんの僅かしか受け入れられていない。この六〇歳を優に越えた天才は、大きな禿げあがった額をして、つよいウィーン訛りで喋り、かなりの巨漢だが、心情はいたって素朴、澆刺として親しげな、このアントン・ブルックナーは、世に受け入れられないにもかかわらず生半ならぬ数の彼の作品のその大半が——まさしく不可解でもあれば腹立たしくもある世の無関心の結果として——公刊されぬままになっている。たしかにまったくというわけではないにせよ今日に至るまでほぼ知られざる存在である。

かなりの高齢にもかかわらず、ゲルマンの作曲家たちの中に当然ふさわしい地位を認められて仲間入りすることはまだないまでも、その名が話題に上るようになり、また新たな世界を切り拓く唯一真に独創的な実力が、すなわちブラームスに比肩するその実力が衆目の認めるところとなって、ようやくまだ四年を閲するのみ、かたやブラームスといえはすでに二十年來神格化され崇敬の的となっているのである。

或る一人から愚痴的とされ侮られ、その他の人々からは故意に無視されて——とりわけ反動的な党派、ブラームスを神と奉る党派からは、ヴァグネリアーナ一派の頭目と罵倒されて、ブルックナーはさしづめヴァレンシュタインの立

場に置かれるに至ったが、シラーをして謂わせるなら、彼こそは「両派の恩寵と憎悪とで満身創痍」となっている。――」記事の筆者の立場は文面からまたおのずと明らかであるが、ブラームスの手紙に、即ちヘルツォーゲンベルクとの交信の中に、このヴァン・サンテン・コルフは悪玉として登場したこともあった。

二二日の土曜日にはヴェーリングガー墓地でシューベルトの遺骸が掘り出されるのに立ち会うことを得たが、これまた常日頃ブルックナーが抱く死への格別の関心の証であった。翌日の日曜にはウィーン男性合唱協会の歌唱に付き添われて遺骸は中央墓地へと移され、それには楽友協会の執行部と教員、ならびに就中とりわけシューベルト連盟が立ち会って新たに埋葬し直された。ブルックナーの合唱隊（フロージン）も新墓に花束を捧げた由。

二八日まで交響曲改訂の記録はつづくが、末日三〇日には楽章全体を総覧して完了の旨、記している。これが同曲の第三稿に当たる。

* * *

日付なしの九月とだけ記したウィーン発の一八八八年のブラームスの手紙はエリーザベト・ヘルツォーゲンベルク宛のもので、「尊敬する貴女、

貴女の手紙は当地ウィーンでみつかりました、それはトゥーンに行ってしまった、貴女の方はパーゼルにいらした、その間僕は帰途に就いてツェーリヒでぶらぶらしていたという次第。詳細申し上げるつもりはありませんが、なんと苛立たしい成行でしょう！ いったいどれほどの長期間にわたって貴女の葉書は左様ならと言いつづけていたことか、というわけで手紙を書くことが、とんともう興をそそらず、慰めにもなりません。

とはいえ是非とも貴女の宛先は教えていただきたい、それに――こんなことを申し上げても貴女は余計なことと思わ

れるでしょうか、時々は一言お聞かせ下さい、ご様子を。貴女を識るほどの人皆が、貴女のことを想い、心から氣にかけているのです、僕はといえば、まさにこの一番にそのとおりです。

さしあたり貴女に僕がこの上なく益体もない歌曲集を幾つかお送りしたとしても、旅立ちのときにそんなものは置きっぱなしにして下さって一向構いません。旅路で僕がまたそろハイイツと出くわしたことは貴女もおもしろがって下さいますか。僕も亦グロートの《秋》の作曲を試みているところです。取っつきが悪い代物です（難渋退屈な——！）

旅の荷を解いているところで、散らかり放題です。で、こんな雑な葉書にご容赦下さい。でもまたご様子をお聞かせ下さい、出来るだけご機嫌よろしゅう

貴女にこのうえなく恭順なる

J. Br.]

因みに受取人の夫ハインリヒにも同詩の作曲がある。

Chronologie. 1. Bd. S. 560ff.

Goellerich. IV/2. S. 606f.

Herzogenberg. 2. Bd. S. 192f. S. 427f.

十

一八八八年十月十一日は若き日のブルックナーの恩師ジューモン・ゼヒターの生誕百周年の誕生日に当たっていたが、それに先だち甥のモーリッツ・ゼヒターからブルックナーは依頼を受けた。ゼヒターの伝記的な書物の刊行にあたって、ゼヒターの作曲したフーガの推敲を託されたのである。版刻の際に目を光らせて誤謬が生じないように監視すること以上の介入を予想していなかったブルックナーは、依頼者が、文字通り推敲して修正して改訂することを求めていると知るや、やにわに及び腰とならざるを得なかった。興奮に顔を紅潮させてもりながら、「何ということを一休お考えか。この私に、私の恩師のフーガに改良のペンを加えろとでも仰るのですか？——けっして、たえてそんなことは出来かねます！」と応える他に術がなかったのも領けないではない。こんな要請を持ち込んだその主から、印刷に付するのが肝要なことで、そのためには作曲されたまま推敲も経ずに残された曲の中にあるいは技術上の誤謬なり不注意の誤記がないともかぎらない、それを見てもらいたい、との懇切な説明を受けてようやくブルックナーもやや平静を取り戻す。そのためにも少しでも役立つなら師に報いられようかと、胸中の葛藤と折り合いをつけることが出来た。さっそく手近のハルモニウムに向かうと、そのフーガを弾いてみた。先ずは通して弾いてみてから、再び繰り返して弾きながら、頷き、満足の笑みを洩らす。一度ならず弾き手は声に出して叫ばずにはいられなかった。格別にそれらしいところになると、陶然として「そう、そう、まさしくこれこそわが親愛なる先生だとよく分かる」、と。弾き終わって最後の音が消えるのと、ブルックナーは楽譜を手に取り、もう一度作品を、あらためて初めから終いまで見渡して、彼の師の甥に向かってやおらこう語った、「いや、じつに先生は厳格でいらっしやった。でも、だからこそ彼に就けば学ぶことができたので

す」。

ブルックナーが好んで師に就て語った逸話によれば、「私が聖堂オルガニストだった頃のことだ、ゼヒター先生の所に出かけて行って、課題を提出した。ある一箇所に来ると、つまり私が法則を逸脱した箇所に来ると、かれは非難がましく私の方を見ては、人差し指を上げて、こう仰ったのさ、〈吾輩にはなにやら、貴君も亦あの連中の一人とみえるが……！〉」

ドイツ・ボヘミアの森連盟の長を勤める著述家にして教育者でもあったモーリッツ・ゼヒターとは気の置けない仲であつたらしく、飲食を共にして歓談し、同年にブラーターで催された大博覧会では、ともに散策しては懲りずに見初めた女の子のことを語り合うことも出来たらしい。

* * *

同年十月十六日にビルロートはウィーンからブラームスに認める、

「親愛なる友よ！

君に一言語りかけずには今日という日を閉じることが出来ない。君の新作の歌曲の数々に僕はいたく心揺り動かされた。見事だ！すべてが全く以て見事だ！もう知っている真珠のことは語るまい。それ以外の寶石に就て語ろう。この、ときに深く、ときに明るく澄んだ輝きの中に何という悦びが宿っていることか！どうしてこれが言葉に尽くせようか！さしあたり僕は〈墓地にて〉「作品一〇五の四」に一番深く震撼された。灰色の、厳しくも美しい戦慄のすべて、これは君のレクイエムの第二番目の合唱や、運命の女神の歌で僕を捉えたのと同じものだ、今度の歌でも僕は総身に戦慄が走ったよ。永遠なるものを、有無を言わずこんな小さな小さな器に盛る術を心得ているのは君だけだ。——それか

らへさすらい人」〔作品一〇六の五〕、これがいかに僕を惹き付けたかお分かりだろ。初めの写譜を君は残酷にも僕からもぎ取って行ってしまったが、多分、その尋常ならざるリズムの方がさらに魅力があったろうか。でも僕は幸せだ、ここにたくさんの本質的なものが新たな装いでまた見つかったのだから。――〈菩提樹に霜がおりて〉〔作品一〇六の三〕、なんと美しく、なんと心惹かれることか。

それに、ふたたび君が昔のように民謡調をしばしば響かせるようになったこと、これがなんとも僕には嬉しい。〈嘆き〉〔作品一〇五の三〕、〈柳の花〉〔作品一〇七の四〕、それからまた〈乙女の歌〉〔作品一〇七の五〕はなおさらだが、ことのほか気に入った。なんとまた情愛篤く、親密なことか。よく僕は思うのだが、僕はもう、君の詩の扱い方、旋律の掴み方、をすっかり分かっていたつもりでいるが、でも君はつねに何か新しいものを持ち出してくる。…」

Chronologie. I. Bd. S. 563ff.

Goellerich. IV/2. S. 608ff.

Billroth. S429f. (Nr. 259)

十一

一八八八年十一月五日にブルックナーはさる女性に返信を認める、「小生のことをいかががお考えでしょうか？ 貴女の心のこもったお手紙には筆舌に尽くし難い喜びを覚えました次第にて、マルタ様がリンツにお着きになるまで、そのお手紙を先ずは服の隠しにしまつて心から大切に致して待ちわびておりました。ところが突如として小生のこの宝物がもう見つからなくなつてしまつたのです。家のカティのせいかもしれません——探してみましたが甲斐のないことでした。という次第にてこの宛先は、小生が住所録から探し出したものです。

こんな御厚意に衷心から御礼申し上げますとともにまことに押しつけがましいことでは御座いますが貴方のかくも麗しきお写真を頂戴出来ませうようお願い致します。（実情を申し上げます）今すぐお会いするわけには参りません。であればこそ貴方のお姿を頻繁に拝みたいのです。

小生おそろしく多忙を極めまして、そのせいでいささか気が減入っております。是非とも御健康でいらして下さい、小生は完全に健康とは申せません、そのため先ずはシュレーター教授に診てもらふことになるでしょう——咽喉のためです。

やんごとなき知事夫人様に小生から御手への接吻をお伝え下さいますよう、知事様にも小生からの敬愛をお伝え下さいますよう！ 貴方の御手に接吻の御挨拶を申し上げつつ／貴方を敬愛する友

A. ブルックナー、一区ヘス小路七番」。

この手紙の宛先は、その地の弁護士エルンスト・イエーガー博士のところまで家庭教師を務めるマルタ・ラウシャーと

いう人であった。リンツの住民登録帳にはマルタではなくマリアと記載されているが、音楽家からの手紙は無事届いたらしい。果たしてブルックナーの切なる願いは叶えられたとみえ、二三日付の礼状が残る、「貴方の素敵な絵姿を頂戴して、小生の喜びがいかほどかとも言葉には尽くせません。衷心から御礼申し上げます。かくも見事に撮影された方は、何時も仰るように取るに足りないなど言っていたくわけには断じて参りません。高邁な知性を具え、見事な教養を蓄えられた、麗しき女性であります、しかもこの上なく高貴な婦人道德を身につけておられます！さらなるお近づきを許されるなら誰もが、ただただ感謝して、貴女が今あるが儘にあり続けて欲しいと神に願うことでしよう！……」

今月も亦、改訂熱冷めやらず連日のように曆にその記述が認められるが、二六日にヨーゼフ・シャルクは弟フランツに認める、

「親愛なる兄弟！

君の回復が進んでいることを聞いて嬉しい、お望みのものを同封する。あんまり気を張り詰めて仕事をしすぎないよ。とくにブルックナーに頼まれてお知らせするが、彼からくれぐれもよろしくとのことだ。最近も〈ケーゲル〉で彼と二人きりで夕べを共にしたときも、彼は君のことを、君が本当にお気に入りだと言うことを、語って語って語り已まなかったから、つい僕もほろりとした次第だ。今彼が異常な努力を払って取り組んでいる第八と第三の数多の改変も君の判断に俟つということだ。とくに断って置かなければならないが、終曲のホ長調と君のお気に入りの箇所との間のスラーの多くが削除された、と彼は言っている。それが為になるのかどうか、僕には疑わしいが。でも彼の信するが儘に任せて、彼の上機嫌を継続させることとしよう。いずれにせよ、今すぐ彼にちゃんと手紙を書いてやってくれ給え」

* * *

一八八八年十一月二日にクララ・シューマンにブラームスが認めた手紙が前者の日記に書き写されている、「…最近お話ししたヴァイオリン・ソナタをヘルツォーゲンベルク夫妻に送ったところ思いがけなくも喜ばしい手紙を貰いました、つまりこのソナタが貴女のお気に召すかどうかしか僕は考えていない、と。ご覧いただけるとは思ったものの果たして時間がおありかどうか分からなかったのでヘルツォーゲンベルク夫妻に送って、貴女の方へ送って欲しいと申した次第です。コーニングとでも合奏していただけるでしょうか、また仄聞したところではベルリンにいらっしゃるとか、それならヨアヒムと一緒に…でももし通して弾いてみてお気に召さなければ、ヨアヒムとは合わせずに返送して下さい」。日記にはまだ腕の調子が悪いので二二日にエリーゼとコーニングに試奏させたこと、第一と同じほど気に入ったこと、第二もいいがこちら第三の方を優先すること、を記して、「患い多い中でこんな英気を養う糧」を得たことをクララは謝している。

A. B. Briefe, 2. Bd. S. 42ff.

Chronologie, 1. Bd. S. 564ff.

C. Schumann, 3. Bd. S. 511f.

十二

一八八八年十二月十五日土曜日にベーゼンドルフアー・ザールでヴァーグナー協会のコンサートが催され、ヴァーグナー歌手で鳴らしたイエーガーがヨーゼフ・シャルクの伴奏でヴォルフの歌曲を歌った。メーリケ、ゲーテ、アイヒェンドルフ等の詩に拠るものが披露され、好評を博すると共に批判も受けた。コンサートのもう半分に、シャルクの独奏でベートーヴェンのピアノソナタを二曲、即ち〈ヴァルトシュタイン〉と〈ハンマークラヴィア〉の両大曲を取上げた。その取合わせが火種となる。曰く、ベートーヴェンと伍するとは傲慢に過ぎる、と旧態依然たるインテリから成る協会の面々から、果敢なプログラムを敢行したシャルクは輦轡を買ったのである。

前の月の七日からデーブリングの知人ケッヒェルト一家の館（ヒルシエンガッセ「現在のビルロートシュトラッセ」六八番地）に世話になっていたヴォルフは、木曜毎のヴァーグナー協会の集いにシャルクに随行して顔を出し、自作を歌う機会に恵まれることともなった。娯楽と交友を主眼とするこの定例の会の他にも同協会は、それよりやや正式の催しも折々挙行して、そのような催しの一つにメーリケ歌曲集から三曲がエレン・フォルスターの歌唱とシャルクの伴奏で紹介された。その場に居合わせた、バイロイトでパルジファルを歌い、つい先ごろ引退してウイーンで音楽を教えていたフェルディナント・イエーガーが、歌手のフォルスター嬢には余り感心しなかったものの、曲には強い印象を受け、その何日か後にケッヒェルト家を訪れて熱狂的に語り合ったという。ほどなく同ケッヒェルト家の、都心はメーラルクトの家の音楽室で、ヴォルフがイエーガーとシャルクに自作の数々を自ら伴奏しながら歌って聞かせる次第となったが、この晩以来、イエーガーは、昔日のシュューベルトにとつてのフォーゲルさながらの存在として、ヴォルフの後ろ盾

となつてその作品を紹介する勞をいとわなかつたという。

一八日にフランツ・シャルクはヨーゼフに認める、「ブルックナーが嫉妬を感じているとか。もしかりに華々しく登場した新星のために君らが彼を蔑ろにするようなことが万一あれば、それは彼には大いなる痛手だろうが。無論そんなことはないと思つている。彼の巨人族的な偉大さと途轍もない森羅万象に呼応する感応力すらも、こんな天才的な俊敏そのものの活力の発露を前に、当座しばらくはいささか光を減ずることがあるにしてもだ。我らが盟友ヴォルフも亦、ブルックナーの抗し難い力をよく感じて、彼を敬うことをすでに学んでいるさ」。

年も押詰まつて二八日にフランツ・シャルクはブルックナーに改めて懇ろな文面を認める、「小生が先生から御教示を頂くとついでに幸運な恩恵に与り得ました素晴らしい時間を想いつつ、掛け替えなき師であられます先生に、感動籠めて心底から、幸あれとお祈り申し上げる仲間にも小生をも加えていただけますようお願い申し上げます。もはや先生のお傍に親しく侍ることが叶わないとは、小生にとりまして痛恨の極みと、その欠乏を嘆かざるを得ないところであります。かくなる上は、新しき作品が、同時代ならびに後代を驚嘆で満たすべき作品が、力強く芽を吹き生い育つことを祈念して想像することができのみであります。願わくは新年にでもそれについてお伺いできることを望んでおります。それまでは幸多き新年を先生の為に寿ぐことで満足せざるを得ません。来るべき新年には何卒、ミュージズの恩寵と、愉快なる気分が、先生に欠けることがありますように、我々すべてに至福を齎す第九交響曲を完成されますように。大晦日には、この上なく敬愛致しますお師匠様、ひたすら先生のことを感謝に満ちた愛情を籠めて想いつつ、第九交響曲の幸を祝つて盃を乾すこと怠りないものであります」。

* * *

一八八八年十二月十一日にブラームスはビルロートに気送郵便はがきを送る、「親・友「親愛なる友よの短縮」！ フ
 バイ氏と僕はつまり明日の十一時に君を訪問するところまで漕ぎつけたよ。君に先ず尋ねもせずにハンスリック殿とカ
 ルベックも誘った！ H. はたった今まで此処に居たが、とても喜んでゐる！ 願わくは君のところに差支えがなけれ
 ばいいが？ 心より君の J. B. F.」ハンガリーの傑出したヴァイオリニストのフバイ（フーバイとも呼び習わすが）
 はクリスマスにブラームスの第三ソナタをマイニンゲンで弾き、ウィーンでのプロローブ——ビルロート邸での予定——
 にやって来たのである。

A. B. Briefe. 2. Bd. S. 46

Chronologie. 1. Bd. S. 566ff.

Walker. Hugo Wolf. S. 254f.

Billroth. S436f.

引用・参考文献

本文中の各章末尾に、以下の文献を括弧内の略号で示した。

- Bruckner, Anton: Briefe 1852–1886 (= A. B. Briefe)**
Hellsberg, Clemens: Demokratie der Könige. Die Geschichte der Wiener Philharmoniker. Zürich-Wien-Mainz 1992
(=Hellsberg)
- Scheder, Franz: Anton Bruckner Chronologie. Tutzing 1996 (=Chronologie)**
- Göllerich, August Auer, Max: Anton Bruckner. Regensburg 1936 1974 (=Göllerich)**
- Wessely, Othmar (Hrg.): Bruckner-Studien, Wien 1975 (=Bruckner-Studien)**
- Anton Bruckner. Dokumente & Studien. Hrg. v. Grasberger, Franz. 2. Bd. Graz 1980 (=Dokumente)**
- Decsey, Ernst: Bruckner. Berlin/Leipzig 1921 (=Decsey)**
- Billroth, Otto Gottlieb: Billroth und Brahms im Briefwechsel. Berlin und Wien 1935 1991 (=Billroth)**
- Brahms, Johannes. Kalbeck, Max. (Hrg.): Johannes Brahms im Briefwechsel mit Heinrich und Elisabeth Herzogenberg. Berlin 1908 (=Herzogenberg)**
- Brahms, Johannes. Moser Andreas. (Hrg.): Johannes Brahms im Briefwechsel mit Josef Joahimm. Berlin 1908 (=Joachim)**
- Litzmann, Berthold: Clara Schumann. Ein Künstlerleben. Dritter Band. Leipzig 1910 (=Clara Schumann)**
- Walker, Frank: Hugo Wolf. Graz. Wien. Köln 1953**

(すなが・つねお 法字部教授)